神話空間の詩学

高橋英夫

青土社

高橋英夫

青土社

神話空間の詩学
© 1978, Hideo Takahashi.
一九七八年一〇月二五日印刷
一九七八年一一月一〇日発行
定　価　一六〇〇円　1095-400038-3978

著　者　高橋英夫
発行者　清水康雄
発行所　青土社　東京都千代田区神田神保町一―二九　市瀬ビル（電）二九一―九八三一
振替東京(九)一九二九五五

印刷所　松澤印刷
製本所　美成社
装　幀　高麗隆彦

目

次

風と翼　リルケ　7
告知する風　ムシル・小川国夫・辻邦生　17
神異の通過　宮澤賢治1　27
透明な凝視　宮澤賢治2　37
修羅のことば　宮澤賢治3　47
風のファルス　坂口安吾1　59
気密空間の外で　坂口安吾2　69
偏西風　坂口安吾3　79
「さやかに風も吹いてゐる」　中原中也1　89
流れる水　中原中也2　101
空への偏執　中原中也3　111
幻視的空間　中原中也4　121
垂直性の矢　富永太郎1　131
眼玉の蜻蛉　富永太郎2　141

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

藁の熱　富永太郎3　153
前世への背走　中島敦1　163
自意識と輪廻　中島敦2　173
元素的自然の前で　井上靖1　183
歴史を喚起する　井上靖2　193
駈けてゆく少年　井上靖3　203
凧を揚げる少年　井上靖4　211
ロマネスク・海・詩人　井上靖・辻邦生・中村稔　221
非存在の軸　吉田健一1　231
風にたゆたう対話　吉田健一2　241
琥珀の夜から朝の光へ　吉田健一3　249
汎現在と時間　吉田健一4　957
時間と神話空間　吉田健一・リルケ　267

神話空間の詩学

風と翼

サモトラケ島というのは、地図でみるとエーゲ海の北東部にあり、ギリシア本土よりは、トラキア海岸やダーダネルス海峡の方に近い。この島の名前は、私にいつも二つのことを思い出させてきた。まずこの島は、カベイロイと呼ばれた侏儒的原人を崇拝する古代信仰の中心地である。次にここは、サモトラケのニケと呼ばれている有名な彫刻の出土の地である。どちらもたいへん興味のある問題を含んでいるが、その二つをいきなり結びつけるわけにはいかない。ニケ像にふれて話の緒口をつけようと、その島の名を挙げたまでである。

ルーヴル美術館にあるというサモトラケのニケは、実見したことはないが、種々の角度から撮られた写真で充分に馴染みふかい。ニケは「勝利」であり、したがって勝利の女神像である。ニケ像は他にもパイオニオス作など多数残っているという。最近、東京で開かれたポンペイ展でも、美しい赤の地に描かれた小さな壁画のニケが並んでいるのを見た。これは最も好まれたモティーフの一種で、ほとんど類型化していたとさえ言えそうだ。しかし数あるニケの中でも、どちらかといえば後期の、様式史的にはヘレニスティックに属するサモトラケのニケの印象がぬきんでて強いのは何故だろう。

附随的な理由はいろいろ挙げられるだろうが、一番の理由は、それが大きく左右に張りひろげた巨翼をそなえ、まさに天空から舞い降りて舟の舳に立った瞬間の力動的なフォルムを、強く印

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

象づけているからにちがいない。次に、このニケには首が欠けていることも大きい。サモトラケのニケは、百以上の断片であったのを復元したものだが、これを「考古学的パズル」と呼んだのは、ミシェル・ビュトール（『絵画の中の言葉』）である。それにしても見事に組み立てられたリアリティを獲得したものだと思うが、その中で肝腎の首だけが欠けているため、かえって想像力を促してやまないように思われる。あるべかりしその顔はどんな表情をたたえていただろうか。この想像には限りがない。ミロのヴィーナスのように万人向きの古典美をたたえた女神の顔だったのか。ひょっとすると、あの巨鳥、怪鳥を思わせる翼に似つかわしく、猛々しい眼、怖ろしげな口許がそこに刻まれていなかっただろうか。

こう想像するのが単なる後世の恣意でしかないなら、私はこれ以上それについて言う必要はないのである。しかしサモトラケのニケが、殊にそういう不確定的な想像力の働く個所に関して、ひどく刺戟的な雰囲気を発散していることは、多分誰にも否定できないだろう。そこがこのニケの魅惑なのだ。その雰囲気、この捉えがたい何かがどこから来ているのかは、まだまだ追いかけて考えてみるに値する問題だと言わざるをえない。

ニケは宙から舞い降りる。そのとき、ニケは全身に風をうけ、エーゲ海の疾風の中に立つ。風なしではニケはニケでさえもない、といった気配がそこから漂い出してくる。この像からは、私はいつもそのことを思うのだ。静止した、スタティックなニケの像といったものを思い浮べるのは難しい。勝利とは、しかし何だろう。それは人間と人間のたたかいや衝突の終了の告知だ。もう一つの告知「敗北」と背をむけあって、「敗北」とは全く相反する方向から、たたかい了った

人間のもとに一挙に訪れてくる告知者、それがニケだ。そのような告知の女神としてのニケは、まさに風に乗って天外から人間にやってくる、としか考えられない。

人間を訪れる神にどのような種類のものがあるか、おそらく無限だろう。しかしそれらの神々の中で、風と共にやってくる神、風が連れてくる神はそう多くはない。ニケはその中の一つである。ギリシアの彫像の中で、その流れる裳裾や、空気の抵抗に耐えて拡がった翼を、まざまざと表現しているのがニケだ。不可視な空気の移動であるにすぎなかった風は、このようにニケという女神の姿態にまつわって神化＝人間化されるとき、はっきりと見ることのできる風となる。風は透明であり、遠方から遠方へ迅速に駆け去り、流れ去って、眼にもとまらない。しかしその風がサモトラケのニケのように人間の肉体にめぐりあったとき、また揺れる樹木のような抵抗物を見出したとき、そこに種々のフォルムの渦巻を生み、ありありと眼に見える風となる。見えないが、しかし見える風というものの不思議さがそこに感じられる。

風をうけてキトン（衣）があらわした女神の胸、腰からは何が見出されるだろう。風に耐えて立つ両脚の緊張を透かしつつ、皺ぐむキトンの裾からは何が聯想されるだろう。私は、そこにおいて、人間および存在を単独のものとして見ることはできない。それらの周囲には広大な空間領域が拡がっている。そしてそこを占めているのははてしない大気だ。しかしそれは、何よりも風となって空間を波立てている勢いそのものであり、風の呼び声ではなかろうか。サモトラケのニケが勝利の像であるのは、それが風を表現しているからにちがいない。そしてニケが風を表現したとき、この像はまたサモトラケ島を一塊のかたまりとして含んだエーゲ海の大空間をも表現し

ているのだ。

サモトラケのニケは想像力の空間に向い、その空間を失われた頭部から放たれる視力で追いかけている。むしろその視力は風の空間を迎えいれようとしている。風が起ったことによって、はじめて人間のまわりに空間が生じ、人間はむき出しの、孤立した人間ではなくなり、空間の中に包まれた人間という意味を獲得するだろう。森林、丘陵、河原の石も、風を呼び風に曝されたことによって、空間の中の存在に変身してゆくだろう。風はたしかに何ごとかを告知している。

しかし、風は何を告知しているのだろうか。誰に告知しているのだろうか。判り切った話だ、と言われるかもしれない。しかしこの疑問はそう易々と片附けられはしない。例えばニケの場合、三段櫂の軍船の舳先に降り立ったあの姿がニケ、つまり「勝利」であることはその通りだとして、では勝利を告知しているのは誰かと考えれば、それは結局のところニケという女神に他ならない。ニケがニケを告知しているのである。神が人間の前に現身となって顕現するとは、こういう神の自己同一性の行為を意味している。しかしその反面、翻然たる烈風に耐えて屹立するサモトラケのニケの姿態は、勝利をみごと手中に収めて全身に昂奮を漲らせている人間の勝利者のそれでもある、という考えは拒みえない。あれは、ニケの女神から勝利を授けられた人間の全身の表情ではないのか。人間はこの時巨翼をざわざわと打ち拡げて、ほとんど人間の域を踏み越えようとする。人間は、ニケの女神とのあいだを、ニケ（勝利）の授受の行為によって結び合され、半ば人間を超え、ニケそのものに化している。あるいは、ニケと呼ばれる女神に化している。神と人間はこの時、このようにして牽引し合い、互いに接近する。この牽引と接近の空間を作り出してい

るのが、あの見えざるがゆえに見える風なのだ。

＊

R・M・リルケに『海の歌』という詩がある。『新詩集別巻』に入っていて、一九〇七年一月末の作といわれる。そのころリルケは、アリーツェ・フェーンドリヒ夫人というパトロンがカプリ島に所有していた別荘ヴィラ・ディスコポリに、数次に亘って客となって滞在し、その間多数の制作をしたが、『海の歌』はその中の一つである。当時の制作が殆んど遺稿として残された中で、『海の歌』だけは早くから有名になり、リルケの詩の選集にもよく採られてきた。私も三十年近く前、はじめて『海の歌』を読んだ時は、真底感心したものだ。この詩が洋々たる海の上を吹く原初的な風をうたっているのである。

蒼古として海より吹き通うもの
夜の海の風。
　誰がために吹くとしもなく。
夜、目醒めている者こそ
この風にいかに耐うべきか
知るであろう。
　蒼古として海より吹き通うもの

原初の岩石にのみ
吹き寄せる風
ひたすらに空間を引っ攫って
遙か遠方(おちかた)よりやって来る……

高みに揺れる無花果(いちじく)の樹は
月光を浴びつつ、この風に
何を感じているのか。

これは、イタリアはナポリ湾に浮んだカプリ島であり、あれはギリシア・エーゲ海のかなたのサモトラケ島である。このように所は異っても、古典古代世界とそれを取巻く海、空、風という組合せにおいて、そこには共通する何かが感じられる。リルケの『海の歌』は、はじめて読んだ当時の新鮮な喚起力を、今では既に失っているようにも思うのだが、しかしリルケ中期の佳作であることに変りはない。何よりもそれは風を感知し、風が作り出す空間を透視している点で、簡潔な詩句の底から開かれた世界を、リルケのあの「開かれたるもの」das Offene を素手で捉まえていると言ってよい。悠久の昔から吹きつづけているこの風に耐えるのは、それと同じくらい時間の彼方から遠く運ってきて今ここにある「原初の岩石」だけだ。ひょっとするとこの岩石の苛烈な存在感は、あの首を欠いてなおも何ものかを凝視し、眼の矢で何ものかを射すくめようと

しているサモトラケのニケの存在感に等しいのかも知れない。すると、リルケの言う「原初の岩石」とは、いわば風が永劫の時間の中で刻んだ顔なき顔ではなかろうか。

風は空間を創造する。しかし風は同時に、空間の中に未知の関聯を生み出し、それをわれわれに意識させもする。そのような存在と意味の関聯が成立しうることを、風がはじめて人間に教えた場合が、どれくらいあっただろう。そこからすれば、風は空間だけでなく、時間と時間的結合をも組織しているだろう。風が運んできた気配は、時には過ぎ去ったものの痕跡であり、時にはこれから全貌をあらわそうとしているものの前触れである。しかし一方風は、その迅速と、無窮動的な流動によって、一つところに止らず、不意打ちの驚きと覚醒を与えもする。そのとき、不意を打たれてはっとした人間が認めるものは、人間対人間のもつれや暗闘や愛撫が生みだした人間的な行為の結晶形などではない。それは人間に現身となって顕現した神と、人間の框を半ば超脱しながら神に迫ろうとする人間との間の垂直的関係にちがいない。風はそのようにして、人間に未聞のものを告知している。人間的日常は、一陣の風とともに超越者の息吹に染められる。

吹きおろし、吹きあげる。竜巻を生み、地上の砂塵をはるかに舞い上らせる。風向き、速度、角度を定めぬ風のならいは、その捉えがたい不確定性のために、実はただ一つの垂直的関係を予告しているのだ。どうやら風こそが、天上から地上へ、また地上から天上へと捲きあげ捲きおろす垂直線の起源であるに違いない。もろもろの文学作品をはじめ、絵画、彫刻、音楽にあらわされた風は、そのイメージから夾雑物を拭い去ってゆくと、最後にはこの垂直線の存在に近づき、垂直線から漂いだすあるきびしい気配に染められてゆくだろう。風は天外から訪れるものの声で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo